



遊美少女魔法情熱床苗♥

逆情発卵産 処女喪失 ？レイ魔獣&手触

DOJIN
R18
成人向け

女騎士の城



【美遊】

「ひぎっ……やめっ……
精液……中……
あああああ……♡♡♡」

そうして再び、魔物が私の子宮内部で
精液を吐き出すと、犯されている時の
数倍の快感が子宮全体に広がっていき、
私は無様な悲鳴と共に絶頂しました。
魔物の子を、醜い化物の子を、
孕むかもしれないのに、私の
脳内は、恐怖や絶望ではなく、
快楽三色に染まっています。

美遊ちゃん魔法少女情発床苗

触手&魔獣レイプ。処女喪失。産卵情逆レイプ。♡

「あああ……♡♡♡
あああ……♡♡♡
あああ……♡♡♡」

「打って悶絶している間に、
の中まで飲み込みました。
か満たされているのが分かります。」

「おちんちん
さん、美遊の
中気さ……♡」

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

女騎士の城

私は美遊Ⅱエーデルフェルト。魔法少女をやっている○学生です。
ある日、謎の魔物討伐のために廃墟ビルへと向かった所、まんまと罠にはめられ、
魔界の触手で出来た肉の部屋に閉じ込められてしまいました。

【美遊】「しまった…！ マジカルサファイア…！」

そして相棒であり、力の源でもあるカレイドステッキが、
触手にはぎ取られ、魔力を分断されてしまいました。

【美遊】「くっ！」

その隙をつき、
触手は私の全身に絡みつくと、
私の股間に1本の触手を
潜り込ませました。

ぐん

ぐん

ぐん

ぐん

ぐん

ぐん

ぐん

触手はそのまま、未だ誰の侵入も許した事の無い、私の膣内へと潜り込みました。処女膜を引き裂き、膣肉が無理やり押し広げられる痛みと、こんなに醜い化け物相手に犯された屈辱で、私は涙を浮かべてしまいます。しかし、もう1本の触手が私の口に入り込み、粘液を注ぎ込んだ直後、その痛みが反転したのです。

ん ん ん つ つ つ ♡ ♡ ♡ ♡

不快感と痛みが、一気に快樂へと変換されます。こんな化け物に犯されて、初めてを奪われたのに、こんなにも気持ちいいなんて……。私は混乱したまま、身動きも取れないまま、化け物に膣内はおろか、子宮内まで蹂躪されました。



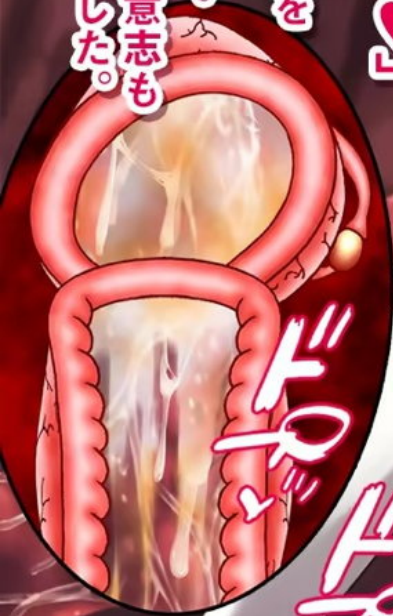
【私】「ひっ♡♡♡やめっ♡♡♡頭がおかしくなるっ♡♡♡あああ♡♡♡♡♡」

生まれてから今まで、一度も味わった事の無い、強烈な快楽。魔法少女としての矜持も砕かれそうになりますが、私は必死に耐えて、マジカルサファイヤを手繰り寄せるチャンスをうかがいます。しかしそんな私をあざ笑うように、私の子宮に潜り込んだ触手は、私の子宮内部にその体液を吐き出しました。

「私」
「おほっ!？」

「おほっ!？」
に あ あ あ つ つ つ ♡ ♡ ♡ ♡

先ほど口から胃に注ぎ込まれた、私の痛みを
快楽へと反転させた、触手の精液。
それが子宮内に注ぎ込まれればどうなるか。
私は生まれて初めての絶頂に達し、反撃の意志も
何もかも折られ、意識が暗転していくのでした。



「はあ……♡ はあ……♡」

んっ…ひっ…!!?
あがああっ♡♡」

やつと意識を取り戻した私は、最初にいた
廃墟ビルで、獣型の魔物に犯されていました。
私の腕よりも太くて長い、馬のような
ペニスが子宮まで突き刺さっています。
会話すら出来ない、知能の低い、
獣同然の魔物に犯され、
私は甘い悲鳴を上げ、
オマンコを締め付けました。



「ひぎっ…!! やめっ…!!
精液っ…中であっ…♡♡
あああああっっ♡♡」

そうして再び、魔物が私の子宮内部で
精液を吐き出すと、犯されている時の
数倍の快楽が子宮全体に広がっていき、
私は無様な悲鳴と共に絶頂しました。
魔物の子を、醜い化け物の子を
孕むかもしれないのに、私の
脳内は、恐怖や絶望ではなく
快楽一色に染まっていました。



散々私を犯しつくした魔物は、満足したかのようにその場から消え失せました。
無様に汁まみれになった私だけが、廃墟に取り残されます。
私は魔物に犯された事、そして魔物相手に気持ちよく
なってしまった事に、悔し涙を浮かべましたが、
実はまだ魔物の凌辱は終わっていないかったのです。

【美遊】

「ぐああっ…!?!」

何これ…! お腹が痛っ…

ああああああっっっ!」

子宮の内側から破裂しそうな強烈な痛みを感じ、
私はその場にかがみこみ、下腹部に力を入れると、
強烈な快楽と共に、恐らくは触手の卵が、
私の膣口から何個も産み落とされて行きました。



美遊
「ひぎっ♡あっ♡あああっ♡♡」

魔物の卵を一つ産み落とす度に、私は1回絶頂し、そしてその絶頂が収まるよりも先に、再び卵が膣から外へとあふれ出し、私は連続絶頂に陥りました。

そして、子宮内の異物感が消えるまで卵を産み落とした所で、それは終わりました。産み落とした卵は、少しだけその場に留まった後、現世から消滅し、魔界へと帰って行きました。

【美遊】
「はあっ…♡
はあっ…♡」

私は絶頂の余韻が収まるまで、そのままの恰好でじっとした後、傍観していたマジカルサファイヤを拾い上げ、ふらふらとその場を後にしました。



二二二

【美遊】

「う、うそッ…♡なんでまだ体が熱いのっ…？」

ははは

うん

ヒキキ

私は廃墟のすぐ近くにあった公園で、制服と全身に付着した魔物たちの精液を洗い流しましたが、私の体を支配する火照りと発情は、消える事がありませんでした。

【美遊】

「だ、ダメなのにつ♡こんな所で…
こんな事♡でも我慢出来ないっ…♡」

私は公園のベンチに座って、自らオマンコに指を伸ばし、かき回します。オナニーなんて今までした事無かったのに。でも気持ちいい。でも物足りない。魔物に犯された時のように、子宮内に精液を注ぎ込まれた。そんな事ばかり考えていました。



グ
ニ
ニ
ニ

ニ
ニ
ニ

【美遊】「はあっ…♡ はあっ…♡ ダメツ…こんな程度じゃ全然収まらない…♡」

せめて
一回

ぐん

ヒキキ

私は十分ほどオナニーした所で、
この火照りと発情は、もはや自分一人の
力では解決できない事だと悟りました。
マジカルサファイヤに分析してもらった所、
私の子宮内には、まだ魔物の子種が残っており、
それが成長するための餌、つまりは精液を得るために、
私を発情させているという事でした。

【美遊】「…精液を集めなきゃ、男の人に出して貰わなきゃ…♡♡」

外科手術的な方法で子宮を取り除く以外には、もう精液を集めるしかありません。
私は男の人を犯して精液を搾り取るために、マジカルサファイヤに協力してもらいました。



グ
ニ
ニ
ニ

ニ
ニ
ニ
ニ

ここからすぐ近くに、浮浪者が寝泊まりしているという噂のある公園があります。
私はマジカルサファイヤに服を作ってもらい、その公園へとやって来ました。

【美遊】「…それにしてもバニーガールって…流石にちよつと恥ずかしい…」

男を釣るならこれしかないと言われ、私はハイレグのバニーガール姿になりました。
やはりマジカルサファイヤはHなのかもしれません。

ドキ



【美遊】「ご、こんばんはっ…♡ おじさんっ♡♡」
【浮浪者】「へっ…？ うええっ！？ こんな場所にバニーガールがっ！？」

私は少し緊張しながら、ベンチで寝ている浮浪者に近づき、声を掛けました。
浮浪者は私の恰好を見て、目を丸くして驚いていました。
女子○学生がこんな深夜にバニーガール姿で声をかけてきたんですから、当然でしょう。
私は浮浪者の目の前で足を開き、先ほどまで犯されていたオマシコを見せつけました。

ザッ

【美遊】

「おじさん、お願いですっ♡

美遊のオマンコに
おじさんの精液を注ぎ込んで
くれませんか？」

【浮浪者】

「うおっ……？」

こんな美少女が俺に……？
へへっ……たまんねえなあオイ」

魔物相手でなくても、こんな不潔な浮浪者を相手に
精液を搾り取るなんて、本来であれば死んでも嫌です。
でも、彼を目の前にして私の体はより強く発情し、
早くその精液を搾り取れと私に命令します。
浮浪者は薄汚れた服を脱ぎ捨て、勃起した
チンカスぺニスを私に見せつけます。
その直後、私の理性は限界に達し、
浮浪者に襲い掛かりました。

ふふふ

ぐん

ははは

にぎにぎ

ん
ぱ
あ



【美遊】「ひんっ♡ あっ♡ ああああっっっ♡」
【浮浪者】「い、いきなり……! ああああ!？」

私に押し倒され、浮浪者が頭を打って悶絶している間に、私はその勃起ペニスを、子宮の中まで飲み込みました。欲しかった快樂に、私の体が満たされているのが分かります。

はまはま

「あっあっ♡ おちんちん気持ちいいっ♡
おじさん、美遊の中気持ちいですか？」

普段の私なら絶対に口にしない、
思いついた事すらない台詞が出ます。
その言葉に興奮した浮浪者は、
負けじと腰を突き上げ、子宮を貪りま

どきどき

うん ぬ

【浮浪者】

「くっ、気持ちよすぎて我慢できねえ！」

【美遊】

「あひっ♡にあああっ♡♡♡♡♡」

私が少し締め付けて腰を動かただけで、浮浪者は私の子宮内部めがけて、大量の精液を吐き出して行きました。同時に、強烈な快楽が私の子宮から全身へと広がっていきます。

【美遊】

「あっ♡おじさんの精液気持ちいい♡♡♡♡♡もっ♡もっ♡と出してっ♡あっ♡♡♡」

私は本能が求めるままの言葉を口にしながら、浮浪者のペニスをキツく締め付け、その精液を一滴残らず搾り取りました。



その後、浮浪者は私と繋がったまま、私の子宮に5回連続で精液を吐き出しました。

【美遊】「はあっ♡ はあっ♡」

【浮浪者】「うぐっ…がっ…」

も、もう勘弁してくれっ…

これ以上はチンポが擦り切れる…」

私はまだまだ満足出来ていませんが、浮浪者のペニスは萎え始めており、精液の出も悪くなっていたので、この辺りが潮時かと思い、ペニスを引き抜きます。子宮内の子種は、精液に含まれる魔力を栄養と残っているため、魔力を吸い取られた精液の残りカスが、私の半開きになった膣口からあふれ出し、地面に水たまりを作りました。



【美遊】「それじゃおじさん♡少し休んだら、また出して貰いますから♡」
【浮浪者】「ひいひい！？も、もう無理だよ！勘弁してくれえ！」
【美遊】「遠慮しなくても大丈夫ですよ♡まだまだできますから♡」

普段なら私がセクハラを受ける立場のはずなのに、いい年した大の大人が、私に犯される事を恐怖し怯えている様子を見て、私は背筋にゾクゾクとした、嗜虐的な感情が沸き上がってくるのを感じていました。



【浮浪者】「そ、そつだ！俺の仲間達を紹介してやつから！な！？」
【美遊】「へえ、お仲間さんですか♡大勢いるんですね？それは楽しみです♡」

先ほど魔物に出された精液と違い、人間の精液で集められる魔力はたかが知れています。子宮内の子種を全て成長させて産み落とすには、もっと大勢の精液が必要でしょう。あんな快樂が、この先何回、何十回も経験出来るなんて。私は本来の目的すら忘れて、待ち受ける快樂を想像し、興奮で身震いしていました。

■発行 女騎士の城
<http://knightmaster.kir.jp/>
■責任者 ナイト
general@kagoya.net
■作成 雪味あいりす・ナイト
■日付 2022年12月31日
■印刷 プリントプロ

※18歳未満の購読禁止
※無断転載禁止



































触手&魔獣レイプ。処女喪失 産卵発情逆レイプ。♡



DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

女騎士の城

私は美遊Ⅱエーデルフェルト。魔法少女をやっている〇学生です。
ある日、謎の魔物討伐のために廃墟ビルへと向かった所、まんまと罠にはめられ、
魔界の触手で出来た肉の部屋に閉じ込められてしまいました。

【美遊】「しまった…！ マジカルサファイア…！」

そして相棒であり、力の源でもあるカレイドステッキが、
触手にはぎ取られ、魔力を分断されてしまいました。

【美遊】「くっ！」

その隙をつき、
触手は私の全身に絡みつくと、
私の股間に1本の触手を
潜り込ませました。



「私」「えいつまさかつ...! やめっ! あがあああつつ!」

触手はそのまま、未だ誰の侵入も許した事の無い、私の膣内へと潜り込みました。処女膜を引き裂き、膣肉が無理やり押し広げられる痛みと、こんなに醜い化け物相手に犯された屈辱で、私は涙を浮かべてしまいます。しかし、もう1本の触手が私の口に入り込み、粘液を注ぎ込んだ直後、その痛みが反転したのです。

「私」「むぐっ!?

んんんつつっ♡♡♡♡」

不快感と痛みが、一気に快楽へと変換されます。こんな化け物に犯されて、初めてを奪われたのに、こんなにも気持ちいいなんて...。私は混乱したまま、身動きも取れないまま、化け物に膣内はおろか、子宮内まで蹂躪されました。



「私」「ひっ♡ やめっ♡ 頭がおかしくなるっ♡ あああっ♡♡♡」

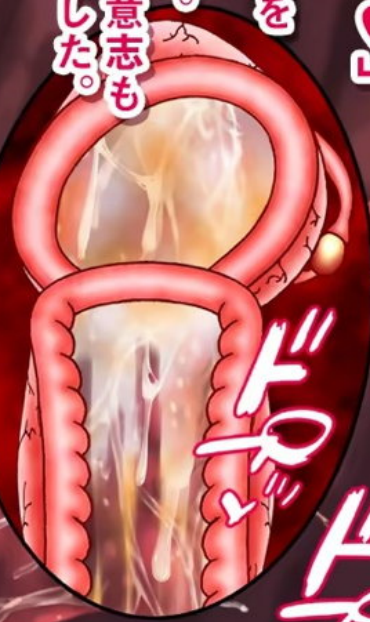
生まれてから今まで、一度も味わった事の無い、強烈な快楽。魔法少女としての矜持も碎かれそうになりますが、私は必死に耐えて、マジカルサファイヤを手繰り寄せるチャンスをつかいます。しかしそんな私をあざ笑うように、私の子宮に潜り込んだ触手は、私の子宮内部にその体液を吐き出しました。

はぁぁぁ
ヒキキ

「私」「おほっ!?!」

にああああつつっ♡♡♡♡♡」

先ほど口から胃に注ぎ込まれた、私の痛みを快楽へと反転させた、触手の精液。それが子宮内に注ぎ込まれればどうなるか。私は生まれて初めての絶頂に達し、反撃の意志も何もかも折られ、意識が暗転していくのでした。



ドク

ドク

ドク

「はあ……♡はあ……♡」

んっ…ひっ…!!?
あがあああっ♡♡」

やつと意識を取り戻した私は、最初にいた廃墟ビルで、獣型の魔物に犯されていました。私の腕よりも太くて長い、馬のようなペニスが子宮まで突き刺さっています。会話すら出来ない、知能の低い、獣同然の魔物に犯され、私は甘い悲鳴を上げ、オマシコを締め付けました。



【美遊】

「ひぎっ……！ やめっ……！
精液っ……中でっ……♡♡♡
あああああつつ♡♡♡」

そうして再び、魔物が私の子宮内部で
精液を吐き出すと、犯されている時の
数倍の快樂が子宮全体に広がっていき、
私は無様な悲鳴と共に絶頂しました。
魔物の子を、醜い化け物の子を
孕むかもしれないのに、私の
脳内は、恐怖や絶望ではなく
快樂二色に染まっていました。



美遊「ひぎっ♡ あっ♡ ああああっ♡♡♡♡」

魔物の卵を二つ産み落とす度に、私は1回絶頂し、そしてその絶頂が収まるよりも先に、再び卵が膣から外へとあふれ出し、私は連続絶頂に陥りました。

そして、子宮内の異物感が消えるまで卵を産み落とした所で、それは終わりました。産み落とした卵は、少しだけその場に留まった後、現世から消滅し、魔界へと帰って行きました。

【美遊】「はあっ…♡ はあっ…♡」

私は絶頂の余韻が収まるまで、そのままの恰好でじっとした後、傍観していたマジカルサファイヤを拾い上げ、ふらふらとその場を後にしました。



「あーっ♡♡♡♡♡」

「あーっ♡♡♡♡♡」

【美遊】

「う、うそッ…♡なんでまだ体が熱いのっ…？」

はあはあ

ぐん

ヒキキ

私は廃墟のすぐ近くにあった公園で、
全身に付着した魔物たちの精液を
洗い流しましたが、私の体を支配する
火照りと発情は、消える事ありませんでした。

【美遊】

「だ、ダメなのにつ♡こんな所で…
こんな事♡でも我慢出来ないっ…♡」

私は公園のベンチに座って、自らオマンコに指を伸ばし、かき回します。
オナニーなんて今までした事無かったのに。でも気持ちいい。でも物足りない。
魔物に犯された時のように、子宮内に精液を注ぎ込まれたい。そんな事ばかり考えていました。

グ
ン
ン
ン
ン

グ
ン
ン
ン
ン

【美遊】「はあっ…♡ はあっ…♡ ダメツ…こんな程度じゃ全然収まらない…♡」

せめて
一回

ぐん

ヒキキ

私は十分ほどオナニーした所で、
この火照りと発情は、もはや自分一人の
力では解決できない事だと悟りました。
マジカルサファイヤに分析してもらった所、
私の子宮内には、まだ魔物の子種が残っており、
それが成長するための餌、つまりは精液を得るために、
私を発情させているという事でした。

【美遊】「…精液を集めなきゃ、男の人に出して貰わなきゃ…♡♡」

外科手術的な方法で子宮を取り除く以外には、もう精液を集めるしかありません。
私は男の人を犯して精液を搾り取るために、マジカルサファイヤに協力してもらいました。



グ
ニ
ニ
ニ

ニ
ニ
ニ
ニ

ここからすぐ近くに、浮浪者が寝泊まりしているという噂のある公園があります。私はマジカルサファイヤに服を作ってもらい、その公園へとやって来ました。

【美遊】「…それにしても外なのに競泳水着って…流石にちよつと恥ずかしい…」

男を釣るならこれしかないと言われ、私はハイレグの競泳水着姿になりました。やはりマジカルサファイヤはHなのかもしれません。

止まれ



【美遊】「ご、こんばんはっ…♡ おじさんっ♡♡」
【浮浪者】「へっ…？ うええっ！？ こんな場所に競泳水着の女の子がっ！？」

私は少し緊張しながら、ベンチで寝ている浮浪者に近づき、声を掛けました。

浮浪者は私の恰好を見て、目を丸くして驚いていました。

女子○学生がこんな深夜に競泳水着姿で声をかけてきたんですから、当然でしょう。

私は浮浪者の目の前で足を開き、先ほどまで犯されていたオマニコを見せつけました。

ザッ



【美遊】

「おじさん、お願いですっ♡」

美遊のオマンコに
おじさんの精液を注ぎ込んで
くれませんか？」

【浮浪者】

「うおっ……!？」

こんな美少女が俺に!?!?
へへっ……たまんねえなあオイ」

魔物相手でも、こんな不潔な浮浪者を相手に
精液を搾り取るなんて、本来であれば死んでも嫌です。
でも、彼を目の前にして私の体はより強く発情し、
早くその精液を搾り取れと私に命令します。
浮浪者は薄汚れた服を脱ぎ捨て、勃起した
チンカスぺニスを私に見せつけます。
その直後、私の理性は限界に達し、
浮浪者に襲い掛かりました。

ふん

ふん

ふん

パッ

ふん



ビキ

ふん



【美遊】「ひんっ♡ あっ♡ ああああつつっ♡」
【浮浪者】「い、いきなり…！ ああああー！？」

私に押し倒され、浮浪者が頭を打って悶絶している間に、私はその勃起ペニスを、子宮の中まで飲み込みました。欲しかった快樂に、私の体が満たされているのが分かります。

【美遊】「あっあっ♡ おちんちん気持ちいいっ♡
おじさん、美遊の中気持ちいいですか？」

普段の私なら絶対に口にしない、思いついた事すらない台詞が出ます。その言葉に興奮した浮浪者は、負けじと腰を突き上げ、子宮を貪ります。



【浮浪者】

「くっ、気持ちよすぎて我慢できねえ！」

【美遊】

「あひっ♡にあああっっっ♡♡♡♡」

私が少し締め付けて腰を動かただけで、浮浪者は私の子宮内部めがけて、大量の精液を吐き出して行きました。同時に、強烈な快楽が私の子宮から全身へと広がっていきます。

【美遊】

「あっ♡おじさんの精液気持ちいい♡♡♡もっ♡もっ♡と出してっ♡あっ♡♡♡」

私は本能が求めるままの言葉を口にしながら、浮浪者のペニスをキツく締め付け、その精液を一滴残らず搾り取りました。



その後、浮浪者は私と繋がったまま、私の子宮に5回連続で精液を吐き出しました。

【美遊】「はあっ♡ はあっ♡」
【浮浪者】「うぐっ…がっ…！
も、もう勘弁してくれっ…
これ以上はチンポが擦り切れる！」

私はまだまだ満足出来ていませんが、浮浪者のペニスは萎え始めており、精液の出も悪くなっていたので、この辺りが潮時かと思い、ペニスを引き抜きます。子宮内の子種は、精液に含まれる魔力を栄養として残っているため、魔力を吸い取られた精液の残りカスが、私の半開きになった膣口からあふれ出し、地面に水たまりを作りました。

【美遊】「それじゃおじさん♡ 少し休んだら、また出して貰いますから♡」
【浮浪者】「ひいひい！？ も、もう無理だよ！ 勘弁してくれえ！」
【美遊】「遠慮しなくても大丈夫ですよ♡ まだまだできますから♡」

普段なら私がセクハラを受ける立場のはずなのに、いい年した大の大人が、私に犯される事を恐怖し怯えている様子を見て、私は背筋にゾクゾクとした、嗜虐的な感情が沸き上がってくるのを感じていました。



【浮浪者】「そ、そつだ！ 俺の仲間達を紹介してやつから！ なー！」
【美遊】「へえ、お仲間さんですか♡ 大勢いるんですね？ それは楽しみです♡」

先ほど魔物に出された精液と違い、人間の精液で集められる魔力はたかが知れています。子宮内の子種を全て成長させて産み落とすには、もっと大勢の精液が必要でしょう。あんな快樂が、この先何回、何十回も経験出来るなんて。私は本来の目的すら忘れて、待ち受ける快樂を想像し、興奮で身震いしていました。

■発行 女騎士の城
<http://knightmaster.kir.jp/>
■責任者 ナイト
general@kagoya.net
■作成 雪味あいりす・ナイト
■日付 2022年12月31日
■印刷 プリントプロ

※18歳未満の購読禁止
※無断転載禁止































